

## 寢覚の君の「わが身をたどる表現」論(2)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1997-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 倉田, 実 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1434">https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1434</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 寢覚の君の「わが身をたどる表現」論(2)

倉 田 実

(承前) 本稿は、本誌『大妻国文』第27号に掲載した前稿の続きである。前稿では、寢覚の君の「わが身をたどる表現」を、日本古典文学全集本『夜の寢覚』で巻三まで検討した。本稿は、紙数の関係で、巻四の検討のみになる。問題にしている寢覚の君の、巻四における「わが身をたどる表現」の用例を再掲すれば、次のようになる。以下、前稿同様にこの用例に即して表現性を考えていくことになる。

- |    |                                      |          |        |
|----|--------------------------------------|----------|--------|
| 15 | 昔より今にめやすからずつゆばかり心にくき思ひやりなくのみある身のありさま | 心・女君     | 四・346頁 |
| 16 | 朝ぼらけ憂き身霞にまがひつついくたび春の花を見つらむ           | 歌・女君↓宰相上 | 四・371頁 |
| 17 | いかになり果つべき身                           | 心・女君     | 四・376頁 |
| 18 | 昔より憂くあはつけき名をのみ立つ身の契り                 | 心・女君     | 四・394頁 |
| 19 | あいな身のありさま                            | 心・女君     | 四・396頁 |
| 20 | なれるわが身                               | 心・女君     | 四・411頁 |
| 21 | 見え果つべき身かは                            | 心・女君     | 四・423頁 |
| 22 | 故殿の心掙のみこそこの世の思ひ出でにすべき身               | 心・女君     | 四・428頁 |
| 23 | はかなき御歩きなどにごととしげなる人の御身                | 地・女君     | 四・435頁 |

#### 四 物語第三部——卷四

卷四は、卷三からそのまま連続し、寢覚の君と男君が一晩過ごしたその早暁の場面からになり、用例もここに認められる。したがって、帝の闖入事件の余波は当然のことながら尾を引いており、寢覚の君の思念はこの事件を反芻することで形成されている。

「15昔より今に目やすからずつゆばかり心にき思ひやりなくのみある身のありさまかな。ものの心を思ひ知りしより、『何事も、なとてか人に劣らむ。いかで、いみじう重りかに、恥かしく、人にすぐれても、ただなる世に過いてばや』とのみ思ひおごりしものを。幸などいふことこそ、心およばぬかたにて、思はずにもあらめ、ただ我が身のありさまばかりだに、思ひしにあらず、昔よりけしからず、あはつけく、軽々しう、憂きものに、人に言ひそらしらるるを事にて、やみぬべかめるよ」と、尽きせず悲しう思ひ入るに、まことに心地もかき乱るやうになりて、いといみじう心苦しげなる御気色を、我もうち泣きたまひて、慰みわびたまふに、ことと明くなりぬめり。(四・346~347頁)

この部分には寢覚の君における最も長大な「わが身をたどる表現」が認められる。寢覚の君は、15「昔より今に目やすからずつゆばかり心にき思ひやりなくのみある身のありさま」とわが身をたどって、それがそのまま意識の流れにも似た内面の把握になっている。男君との密会と秘密の子の出産に始まり、兄弟との不和、老閨白との強いられた結婚、夫の死、そして、今回の帝の闖入事件、と続いた「昔より今に」に至る半生を対象化するわけであり、過去から現在に至る過程を問題にするこのありかたは、卷三以降主題化されている。この「昔より今に」とする把握の仕方だけをとってみても、すでに「昔より、世を憂きものと思ひ知り、嘆かしきも、誰ゆゑにもあらず」(三・313頁)、「さも人に似ず憂かりける身のありさまかなと、昔より今をかきくらし」(三・314頁)とたどられていた。そして、この段ではさらに、その

「昔」とするより以前のわが身も回顧されている。同じような内容はさらに巻五にも認められるので、併せて並立させる  
と次のようになる。

巻四——①何事も、などてか人に劣らむ。②いかで、いみじう重りかに、恥かしく、人にすぐれても、③ただなる世に  
過いてばやとのみ、④思ひおごりしものを。(347頁)

巻五——すこし物思ひ知られしより、①何事も人にすぐれて、②心にくく、世にも、いみじく有心に、深きものに思  
はれて、③なにとなくをかしくてあらばやと、④身をたてて思ひあがりしに、(455頁)

この両者は、ともに巻の始発部分に位置し、さらに措辞が互に対応して共通した内容になっている。仮に四点に押さ  
えたが、①と②は分ける必要はないものの、①は統括的な言辭ともみられよう。他者との関係における生き方の抱負・前  
提のようなものがこの①であり、それを捕捉するのが②の個別的な内容になる。そして③が、生きる姿勢や態度のような  
ものであり、④は当時の思いを現在時から回顧し把握する部分になる。巻の一、二において、ここに提示されたような思  
念は必ずしも明白ではなく、中間欠巻部分がどうなのか予測がつかないが、巻四あたりから新たに掘り起こされた寢覚の君  
の過去にあった思いである可能性はあろう。『源氏物語』の柏木が、「柏木」巻になって、それまで語られていなかった過  
去半生を改めて述べたのと同じような語り方になる。柏木が「何事も、人に今一際まさらむ」と思っていたように、  
寢覚の君は「何事も、などてか人に劣らむ」「何事も人にすぐれて」いようと、「思ひおごり」「身をたてて思ひあが  
り」していたという。そういう過去の願望が今は無惨に挫折していることを確認せざるを得ないのである。

寢覚の君の思念は、こうした「昔以前」を確定することによって、そこから逸脱してしまった「昔から今」に至る、  
「目やすからずつゆばかり心にくき思ひやりなくのみある身」が悔恨されている。かつて思った「人にすぐれても、ただ  
なる世に過」ごすことも、「なにとなくをかしくて」あることも現在ではあり得ないことであり、「目やすく」あることが  
できないでいる。この「目やすし」は、見た目に感じよしの意だが、ここは世間の目から見てというニュアンスが含まれ

ていよう。全集本が「数奇な運命をたどり人の噂の種になってきたことをいう」と指摘する通りであり、世間の思惑から自己の生きざまを把握する仕方になっている。寢覚の君の運命が、世間から見て決して「目やすし」とされるものではないことを確認するのであり、この把握の仕方はさらに用例19で「名をのみ立つ」あり方としても提示されていく。後に確認することになるが、「名を流す」ことを危惧するところからわが身を把握する仕方が寢覚の君に特徴的になるが、ここではそれが「目やすからず」で行われていることになる。そして、この後の生霊事件からさらに己の不遇が意識されるに及び、老閨白と結婚した頃が「その折ばかりこそ、いささか、身の人聞目やすきほどはありけれ」(四・414頁)と思うようになつていく。「目やすく」あることが、願われて仕方がないのであり、不幸意識でしか形成されなかつた老閨白との結婚もこの時点では「目やすき」ものと写るようになる。「目やすし」とされる程度は、置かれた情況に応じて内実が相違するわけであり、「目やすし」とは思えなかつた境遇も、より不幸の度合が強まれば、その境遇さえ「目やすし」とされるようになるわけである。

寢覚の君は、「昔から今に、目やすからず」とその境遇を把握するだけでなく、さらに「つゆばかり心にき思ひやりなくのみある」ことも反芻せざるを得ない。「心にくし」は、先に「昔以前」のこととして引用した巻五の「心にくく、世にも、いみじく有心に、深きものに思はれて、なにとなくをかしくてあらばや」とあるものと連関しており、ここも世間から「心にくし」と見られるようなあり方が想定されている。また「思ひやり」は、世間から想像されるあり様のことであることは動かない。こうした世間という外側を想定をしつつわが身をたどり、確定していくやり方が、寢覚の君の特徴となつているわけである。

この段では、わが身を否定的にたどることが重畳している。用例15に続いて、「幸などいふことこそ、心およばぬかたにて、思はずにもあらめ、ただ我が身のありさまばかりだに、思ひしにあらず、昔よりけしからず、あはつけく、軽々しう、憂きものに、人に言ひそしらるるを事にて、やみぬべかめるよ」とさらに言葉は畳みかけられている。「けしから

ず」「あはつけし」「軽々し」「憂し」と、男女関係でのあり方を主として指示しながら否定的な言辭が連続しつつ、そこから広がる地平を持った人生的な把握になっていよう。こうした言葉でしか把握され得ない境涯を認識することが寢覚の君の身意識になるのであり、この部分にも用例に計上してはいないが、「我が身のありさま」とある。

こうした身意識が認められることから、この段を「述懐」といわれる場とみなすことができる。「述懐」は、『源氏物語』で、藤壺・光源氏・紫の上に認められたあり方になるが、そこでは限らない榮華と憂愁の念が「わが身をたどる表現」で述べられていた。<sup>(2)</sup> 寢覚の君のは、その延長に位置しつつ、榮華を認識する部分が切落とされ、憂愁の念のみで述懐が構成されている。榮華にかかわるものは、23「はかなき御歩きなどにごととしげなる人の御身」という形で一例のみあるが、これは「御」と敬意が入るように、語り手によるものであり、自身が意識するものではない。榮華が欠落している点は、『夜の寢覚』の獲得した位相として注目すべきであろう。榮華を語るのではなく、憂愁の念の形成と持続を語るにより強い主題性があることを示していよう。

寢覚の君は、「一方の事(帝の闖入)のうとましさを、ゆゆしうおぼいたるままに、ただ今、わが身の後、行く先のあらまし事までもたどられず」(四・371頁)という状態であったが、宮中からの退出がやっと許されて北殿に帰ることができても、それで憂愁の念が払拭できるわけではない。夜中に訪ねてきた男君を会わずに返して朝を迎え、曙の花の木末を見るにつけ、西山で過ごした頃を回顧し、わが身の思ひは詠歌に込められていく。宰相の上(老関白次女)の歌がこの後に位置しているので贈答歌になるが、独詠的な要素が色濃くにじんでいる。

いにしへ、西山にて、「見しながらなる」とながめしほどの嘆かしき、身のありさま、「その折も、よろしうはあらざりしかど、過ぎぬるとなればにや、いとこのごろの心地はせざりしをや」と、うちおぼし較ぶるに、え忍ばれたまはず、なにの折も、世とともに嘆かしかりつる年ごろの、この曙は恋しきことぞ、返るらむ波よりもしげきや。

朝ぼらけ16 憂き身霞にまがひつついくたび春の花を見つらむ

(四・371頁)

すでに寢覚の君において、「憂き身」とする把握は恒常的になっている。「憂き身」は、かつて中間欠巻部分で男君の夢に現れて、「物思ふにあくがれ出でて憂き身には添ふ魂もなくなくぞ経る」（風葉集、恋四、一〇三五）と詠まれていたが、その段階での把握をはるかに通り越して、巻四ではより深刻に詠嘆されている。また、その過去の比ではない現在の深刻さは、ここで自身でも「その折も、よろしうはあらざりしかど、過ぎぬるとなればにや、いとこのごろの心地はせざりしをや」と把握されている。

寢覚の君の詠歌は概して心象語に大きく比重が置かれていて、風景に託されることは少ないが、ここでは「憂き身」意識が、霞のようなはかなさで象られて春の花とともに詠まれており、珍しい歌に見える。しかし、この「霞」や「春の花」は、囁目の風景であるとともに心象のものでもある。ここに見られる作中引用歌になる「見しながらなる」は中間欠巻部になるが、これは『拾遺百番』（第三番右）に、

広沢に独りながめて、姉の上もろともに起き臥し馴れにし方を思ひ出でたまふにも、「春や昔の」とのみしはばれて

咲きにはふ花も霞ももろともに見しながらなる春のあけぼの

とあることで知られる。この「咲きにはふ」の歌で、寢覚の君は春の曙の花や霞を詠じていたのであった。それがここで引用されているからには、「朝ぼらけ」歌の霞や春の花は、囁目の風景によっていただけでなく、過去に詠じた心象に根差していることにもなろう。囁目の風景であるとともに心象のものと見られる所以であり、引用構造が風景と心象とに歌ことばを重層化させていくあり方を認めることができよう。作中歌引用は、『夜の寢覚』において方法的意義を荷なっているわけである。

「憂き身」を嘆じる寢覚の君の様子は、この場面で自身も「憂き身」である宰相の上によって見られている。

「かばかりならびなく、すぐれたまへる御ありさまながら、いと際限りなきほどにはあらず、絶えずもの嘆かしう

のみおぼしたるを見れば、まいて、憂き身はことわりなりや」と思ひ知られて、涙ぐまれたまひぬ。

宰相の上 いつとだに憂き身は思ひわかれぬに見しに変らぬ春の曙

(四・372頁)

寢覚の君の歌から続いてこの段は「憂き身」の表出で覆われている。宰相の上には、老閑白に最も鐘愛されて入内を期待されながら宰相中将(宮の中將)に盗み出された経緯が想定されているが、寢覚の君と対比することで宰相の上自身にまつわる「憂き身」意識を「ことわり」として納得させている。こうした語りが入ることで、寢覚の君の「憂き身」意識の悲惨さが暗示され、また、両者の「憂き身」意識が立体化されるわけである。

寢覚の君にとっての問題は、帝の懸想だけでなく、当然のことながら帝闖入事件以来復活してしまつた男君の存在もあつた。再び男君が来訪してくると、その応対の仕方から思案しなければならぬ。「きこえざらむもあやしく、きこえむもひたおもてなる心地」がするのであり、縷々とかき口説き恨みを述べる男君の真情がわかるにつけ、寢覚の君は「ざりとて、うちとけ果てむ。憚り多く、許いあべくもあらぬを、17いかになり果つべき身にかと、我もいと涙ぐましく」(四・375~376頁)なつてくる。寢覚の君の「いかになり果つべき身にか」との思いに当面解決はあり得ない。すでに男君には、大皇の宮を母とする女一の宮という正妻がいる。男君との結婚は、問題の解決ではなく、新たな難題になる。寢覚の君は、これまでも「やむごとなき基(女一の宮)を見ながら、我はこよなき劣りさまに」(三・297)なる事態を懸念しており、それ故に男君との結婚は忌避してきている。帝闖入に際して、男君を想起したことはたびたび回想されているが、愛情だけで解決できないしがらみに絡み取られている。かつて、物語第一部で父が「いかにすべき人の御身」かと思案したが、その思案はまだ本人において「いかになり果つべき身にか」と現在進行形なのであり、さらに、生霊事件の後には、21「見え果つべき身かは」と男君との結婚不可能性を確認していくことになる。

寢覚の君がいかに男君を拒否したとしても、執拗に求愛してくるのを止めようはなく、やがて二人の浮き名は広まり、また、大皇の宮の策略によって、帝に振られたというあらぬ噂が立てられて、それが耳に届くようになる。



女君も、漏り聞きたまひて、「さればよ、18昔より憂くあはつけき名をのみ立つ身の契りの、心憂くもあるかな」とおぼしめど、さりとは、いかがはせむ。  
(四・394頁)

ここで寢覚の君は18「昔より憂くあはつけき名をのみ立つ身」とわが身をたどっているが、「名——浮き名、悪評」を問題にするこの把握の仕方は、物語全体を貫通している。巻一の段階でもこの意味での「名」は寢覚の君に使用されており(109頁)、巻三から五の前半にかけては、絶えず「名」が流れることを寢覚の君は悲嘆している。「名」の用例は25例を数えるが、寢覚の君にかかわるのは17例、そのうち12例が寢覚の君自身によるものとなって巻三以降持続的に使用されている。巻三での最初の自身による用例は、「涙のみ流れあふせはいつともうきにくき添ふ名をや流さむ」(三・308)と帝に返歌したものになるが、生霊事件以後は「うとましげなる名をさへ流して」(巻五・456頁)とする例も行なわれるようになる。「名を立つ」「名を流す」は寢覚の君のもっとも忌避する事態でありながら、その事態からけっして救済されないのが、その運命であり、境涯になっている。また、それが物語の主題でもあることは、当初の天人の予言で明かである。「名」が流れることを問題にすると、この「昔より憂くあはつけき名をのみ立つ身」とする「わが身をたどる表現」になるのであり、絶えず世間の迷惑を危惧せざるを得ないあり方が象られている。

ここの「名」には、「昔より憂くあはつけき」という修飾句が付いているが、「あはつけし」は、巻三以降、帝闌入にかわって使用されており、例えば「(寢覚の君が帝のもとに)まづ参りたるさまに、世の人聞き言はむ、憂く、あはつけう、心憂きを」(三・312頁)というような使い方がされていた。「あはつけし」は軽率さを忌避する心情を意味し、「憂く」と連接されていたが、それがここでは「昔より憂くあはつけき名」とされ、さらに「::身」表現を形成させている。帝闌入事件が、おもたく寢覚の君の身意識にわたかまってしまう様態を指摘できよう。「::身」表現は、確実に物語の主題性と連動しているわけである。

女一の宮が病気になる、男君の訪問が間違になっていくが、寢覚の君にとって、それは恨みなどにはならず、次のよう

に思っている。

「19 あいな身のありさまや。いつも、ただ、かくぞかし。まして、今はうちとけ、頼み果てては、いかばかりなべき心の乱れにか。いかならむついでに、なだらかなるさまにて、籠り居にしがな」とは、寢覚の夜な夜な、おぼし明かきぬにしもあらぬに、  
(四・396頁)

寢覚の君は、19「あいな身のありさま」だと、わが身をたどっている。その感じは、「いつも、ただ、かくぞかし」だという。生きることを「あいな——味きなし」とたどる時、そこに用意されるのは、出離、出家の道である。物語は、生霊事件を語る前に、寢覚の君の出離願望を語り、この後の出家を待んだ西山行きを必然化していることになる。

かくして生霊事件が惹起されるが、寢覚の君が生霊となって女一の宮に取り憑いたとの噂は、自身の耳にまで達し、「いとあさましう、胸ふたが」る思いに囚われる。

「昔より今にとり集めて、20なれるわが身と言ひ顔にあれど、もとより、心のいとおろかに、浅うなりにければ、よくも思ひも入れて、ちぢの憂きふしをあまり思ひ過し来て、言ひ知らずうとましよう、音聞きゆゆしき耳をさへ聞き添ふるかな」  
(四・411頁)

ここの「なれるわが身と言ひ顔に」は、諸注指摘するように、「何のためなれるわが身と言ひ顔に役ともものもの嘆かしきかな」(『和泉式部正集』三〇六、三九五)が引歌されているが、式部歌はまた、校注本が指摘するように「夕されば人なき床をうち払ひ嘆かむためとなれるわが身か」(『古今和歌集』恋五・よみ人知らず・八一五)を踏まえていよう。ともに「嘆く」ためではない人生が言われており、寢覚の君の「なれるわが身」は式部歌から「何のためなれるわが身——何のために生きているわが身」と捕捉できよう。先の19「あいな身のありさま」とした味きなさ通底する無常感が揺曳されてもいる。そういう身に降り懸かったのが、生霊事件になる。

この引用に続いて、寢覚の君は「今となりては、うちとけ頼みきこゆべきものとは思ひだに寄らぬことにて、まこと

に、いみじうつらからむ節にも、身こそ恨みね、人をつらしと思ひあくがる魂は、心のほかの心といふとも、あべい事にもあらぬものを」(四・412頁)と、自身が生霊となることなどあり得ないと確信していくが、すでに噂となつてゐる事態を解決できるものではなく、男君からうとまれる羽目になることも危惧し、結局は「ものはかなき心の怠り」とせざるを得ず、天人の予言の実現を確信することになる。そして、男君が自分の生霊をどう考えているかと思案し、男君はその件を話題にするのをためらうことで、両者のわだかまりがさらに増していくことになる。

物語は、生霊事件と並行させながら、寢覚の君と石山の姫君の情愛を語つてゐる。寢覚の君は、石山の姫君の存在を思うと、「かばかり飽き果つる世の中に、ひき切るべくもあらぬ絆におぼえたまふも、いかがはすべき世ならむ」(四・412頁)との嘆きが浮かんでくる。男君との生活はありえないとするものの、断ち切ることでできない絆になる姫君の存在を思うと、改めて男君との仲を「いかがはすべき世ならむ」と思われてしまう。以前には、17「いかになり果つべき身か」と思案しつつ結婚の不可能性を思つてみたが、姫君を前にすると改めて「いかがはすべき世ならむ」が問題になるわけである。

しかし、生霊事件を介すると事情は変わってくる。寢覚の君は、男君が自分の生霊を「深くまこととおぼすなめり」(四・422頁)と把握しており、また、自身では生霊になることなどあり得ないとしたものの、次のような思案も存在している。

「この人のほのめいたまふたびごとに、乱るる心、今や今やあくがれ寄るらむとこそ、我ながらゆゆしけれど、さ  
はれ、21見え果つべき身かは」とおぼせば、

(四・423頁)

先に引用したように、寢覚の君は「人をつらしと思ひあくがる魂」の所在を自ら否定していた。それなのにこの思案はどうみればいいのか。このあたりの解釈で校注本は、「この方が私の所へふらつと立ち寄られる度毎に乱れる私の心が、たったの今も、ふらふらとさまよい出て内大臣の身に取り付いて女一宮の所へ行くのかと思う」としているが、全

集本などのように「男君がちらほら女一の宮のもとに顔を出されるたびごとに、私の悩み乱れる心が、たった今にも、身からさまよい出て女宮の方に寄りついているのだろうか」とする方がいいだろう。そうすると、寢覚の君には「人をつらしと思ひあがるる魂」の所在は否定されるものの、「乱るる心」が女一の宮のもとに「あくがれ寄る」ことは否定されていらないことになるうか。そうなれば、この「乱るる心」は、男君に寄せる深層の思慕の把握になる。この後に新中納言（次兄）が参上した際、生霊のことが話題になるが、寢覚の君は「なににつけてかは、その御あたりまであくがれ寄る心のありけむ」（四・427頁）と答えていて、「あくがれ寄る心」の所在を否定しており、ことは齟齬するようだが、内面の把握と次兄への発言では意図するレベルが相違するということになるう。寢覚の君の内面では、「人をつらしと思ひあがるる魂」の所在はともかく、「乱るる心」の存在は認知せざるを得ないのであり、それが女一の宮のもとに行っているのではと思うと、不吉でたまらないわけである。だから、その思慕自体の無効性が意識されて、「さはれ」との断止になり、さらに21「見え果つべき身かは——添い遂げられる身であるものか」となっていく。17「いかになり果つべき身か」「いかがはずべき世ならむ」とたゆたいを見せていた男君との関係が、生霊事件を契機に吹っ切れたことを意味しているよう。この後の寢覚の君の残された選択は、出離以外に当面あり得ない。

石山の姫君が、孫を恋しく思う祖母のもとに戻されることになっても、もう男君との関係を断念した寢覚の君は、それにあらがることもない。「恋しき人（姫君）の御名残のみ身に添ひて」はいるが、「ひたぶるに憂きをそむきてやむべきになぞやこの世の契りなりけむ」（四・426頁）と、独詠している。これは姫君に寄せる情愛を確認しつつ、「憂きをそむきて」出家する決意を秘めた歌になるう。だから、新中納言を前にして、次のように思っている。

「昔より今に、この人（新中納言）に、ただかかるありさまを嘆き扱はれたてまつるよりほかの事なきよ」などうちおぼすに、「思はずなる世を過ごす」と、おぼえたまふべし。22 故殿の心掟のみこそこの世の思ひ出でにすべき身なりけれ」と、恋しう悲しく思ひ知らるるままにぞ、名残の君たち（老関白の遺児）の御扱ひは、いとど心にしみて、

これよりげに憂き世なりとも、なほ忍びて、心の及ばむ限りは後見きこえまほしくおぼされける。(四・428頁)

寢覚の君にとつて、この世は「思はずなる世」でしかない。そうしたこの世において、わが身は、22「故殿の心掟のみこそこの世の思ひ出でにすべき身」なのだと思つてゐる。寢覚の君にとつて、老関白との結婚は、身の不幸以外のものではなかつた。しかし、何ごとも寛大で鷹揚に受け容れて眞実愛してくれた老関白の眞情を思うと、かけがえのないものと思われてくる。似たような感懐は、すでに引用したように、「その折(老関白との結婚生活)ばかりこそ、いささか、身の人聞目やすきほどはあれ」(四・414頁)とあつた。大皇の宮の策略によつて、帝の闖入事件や生霊事件が継起し、さらに男君との關係に懊惱する中であつて、失われた老関白との時代だけが、救いの時と意識されるわけである。だから、その「故殿の心掟」をよき思い出としようとするわけだが、そう意識する身は、すでに出家を意識しているからになる。かけがえのないよき思い出を持つことは、生きる励みになるとともに、この世を見限る契機ともなる。かけがえのない思い出を確認して出家したり、死を決意したりする物語は、『源氏物語』の柏木において行われている。柏木は、女三の宮との密通と薫出生を思い出として、自死するかのようになつた。また、『岩清水物語』を始め鎌倉物語などでも、禁忌を犯して愛する人と契りを結んだことを思い出として出家していく話が多い。寢覚の君の場合は、不幸でしなかつた老関白との生活が、より不幸な状態に圍繞されたことで捉え直されて、思い出として昇華され、出家を思うようになってゐる。寢覚の君の西山行きは、全集本が指摘するように、「父の病氣見舞いにことよせ、悪い噂を打ち消す意味でも西山へ身を避けようとする」ものだが、これまで指摘してきたように、出離、出家などが暗黙に了解されている。これまでに確認してゐるように、寢覚の君の出家願望は、すでに提示されている。西山に移住してすぐに出家という段取りにはならないが、出家が庶幾されていることは否定できない。この世との別れは、すでに寢覚の君において暗黙の前提だらう。生霊事件によつて、男君との關係に、21「見え果つべき身かは」と断念を下している。また、姫君との別れは「ひたぶるに憂きをそむきてやむべきになぞやこの世の契りなりけむ」と詠じつつ、すでに観念していた。そして、わが身は、22「故殿の

心掟のみこそこの世の思ひ出でにすべき身」だと思えるようになっていた。遺児たちが必配だが、出家しても「心の及ばむ限りは後見きこえまほしく」思い、後見は可能のように思っている。物語は、寢覚の君の新たな曲面として、出家を主題化していくことになる。巻四の最後の「わが身をたどる表現」は、西山行きの様子を語るところになる。

「いみじく忍びて。ことそきて」とおぼせど、人の御程やむごとなくのみもてなされ、おのづから枝々繁く広ごりにたるに、人ごとにあまねう情あり、広き御心おきて浅からぬに、いと靡き従ひきこえたまひつつ、いとよそほしうぞ、23はかなき御歩きなどにごととしげなる人の御身なる。

(四・435頁)

西山に赴こうとする寢覚の君は、23「はかなき御歩きなどにごととしげなる人の御身」だとされる。語り手が始めて「…身」表現で荘嚴する寢覚の君の栄耀であろう。西山行きは憂愁の念がもたらす以外のものではないが、ことさら、微行の様子を飾り立てて、その様と背馳するその念を際立たせていることになる。

物語は、西山を舞台にして、さらに巻五へと展開することになる。(未完)

## 注

- (1) 用例の示し方は、整理番号、本文、文章の区別〔地〕は地の文、「心」は心内語、「会」は会話文、「歌」は和歌であることを示す)、話主↓受け手(地の文の場合は空白、心内語の場合は受け手なし)、巻数、頁数の順になる。本文の引用は、鈴木一雄校注『夜の寢覚』(小学館、日本古典文学全集)によるが、表記は私に改めた場合もある。以下の引用も同書に拠る。
- (2) 拙著『わが身をたどる表現』論―源氏物語の膠着語世界―(武蔵野書院、一九九五年一月)参照。